

留学生農家民泊活動の意義と課題

—秋田県仙北市西木町の「第三の故郷を見つける農家民泊」を事例として—

市嶋 典子

要旨

本稿では、秋田地域留学生等交流推進会議主催の「第三の故郷を見つける農家民泊」の詳細を示すとともに、参加学生と受け入れ農家の方に行ったインタビュー内容に基づき、本活動の意義を主張する。

学生達へのインタビューからは、学生達が、農業体験の中でも特に受け入れ農家の方達とのコミュニケーションに意義を感じていたことが明らかになった。そう感じられたのは、たとえ日本語が不十分であっても、自身らが「受け入れられているという安心感」が持てたからであった。また、受け入れ農家の方々へのインタビューでは、外国人を受け入れることに最初は戸惑いがあったが、今は楽しみながら受け入れてくれるようになったこと、農業に自信や誇りをもっており、その自信に基づいて、学生達に農業や農家の生活を伝えようとしていることが語られた。

これらのインタビュー内容を踏まえた上で、本活動の意義と、日本語教育学としての課題を主張する。

【キーワード】：農業体験、留学生交流事業、グリーン・ツーリズム、共修授業、コミュニケーション方略

1. はじめに

本稿では、秋田県仙北市で行われた「第三の故郷を見つける農家民泊」というプログラムにおける農業体験活動を考察し、本活動の意義と日本語教育学としての課題を明らかにすることを目的とする。

「第三の故郷を見つける農家民泊」は、秋田県内の高等教育機関から留学生・日本人学生、引率教員が集まり、1泊2日の農業体験と1か月後の収穫感謝祭に参加するというものである。具体的には、秋田県内で学ぶ留学生が農業体験を通じ、随一の地場産業である農業と農家の暮らしを体験的に理解するとともに、農家の方のお話から、仙北市西木町の魅力を認識し、本事業後も再び同地を訪れるような継続的な関係づくりを目指す。さらに、留学生の出身地、秋田県内での勉学・生活の地に加え、仙北市西木町を第三の故郷として見つけ出してもらうことを最終目標とするものである（秋田地域留学生等交流推進

会議, 2018a)。

本稿では、2018年に実施した「第三の故郷を見つける農家民泊」の詳細を示し、本活動の意義と日本語教育学としての課題点を主張する。

2. 「第三の故郷を見つける農家民泊」の概要

「第三の故郷を見つける農家民泊」は、秋田地域留学生等交流推進会議¹⁾の主催で2009年より開始された事業であり、秋田大学国際交流センターの専任教員が企画・運営を主担当している。本事業は2006年度から公益財団法人中島記念国際交流財団助成²⁾に採択されており、本助成金を予算とすることで、継続して実施されてきた。

「第三の故郷を見つける農家民泊」の開催地である仙北市は、秋田県の東部中央に位置し、岩手県と隣接している地域である。ほぼ中央に水深が日本一である田沢湖があり、東に秋田駒ヶ岳、北に八幡平、南は仙北平野へと開けている。地域の約8割(892.05平方キロメートル)が森林地帯で、奥羽山脈から流れる河川は、仙北地域の水源となっている。総面積は、1,093.56平方キロメートルで、秋田県全体の9.4パーセントを占めている。仙北市は平成17年9月20日に旧田沢湖町、旧角館町、旧西木村が合併し、誕生した(仙北市, 2019)。

「第三の故郷を見つける農家民泊」事業に協賛、協力してくれている仙北市西木町のグリーン・ツーリズム西木研究会は、発足以来、積極的に農家民泊を推進してきた。仙北市農山村体験デザイン室(2019)によると、グリーン・ツーリズム西木研究会は、地域の農家が農業体験を要請されたことをきっかけに1979年から始まった体験型修学旅行の受け入れを始めたことにルーツを持つ。その後、西木型のグリーン・ツーリズムを自主的に推進しようという目的に1998年に設立され、農山村生活体験の受入れや地域の食文化等を研究、伝承している団体である。グリーン・ツーリズム西木研究会は、「相手をもてなすことだけでなく相手の時間を大切にしながら自分たちも楽しむ、自分たちがいかに訪れた人たちと遊べるか、西木でなければできないことは何かを考えながら活動していること」(仙北市農山村体験デザイン室, 2019)が特徴的である。

現在は、グリーン・ツーリズム西木研究会の前会長の藤井けいこ氏、現会長の門脇富士美氏が中心となり、「第三の故郷を見つける農家民泊」の参加者を積極的に受け入れてくれている。なお、2018年度の受入れ農家民宿³⁾、代表者と各農家民宿の受入れ人数は以下の表のとおりである。

1) 秋田地域留学生等交流推進会議とは、秋田地域の関係大学等の長、秋田地域の国・地方公共団体の関係機関、経済団体、国際交流関係団体の長又は代表者、学識経験者を構成員とし、秋田地域における留学生等の受入れの促進及び交流活動の推進を図ることを目的としたものである。秋田大学学長が議長を務め、秋田大学国際交流センターが事務局を担当している。(秋田地域留学生等交流推進会議, 2018b)。
2) 公益財団法人中島記念国際交流財団助成は、「日本の諸地域における外国人留学生受入れ環境を整備し、交流を促進する」(独立行政法人日本学生支援機構]ASSO, 2019)ことを目的としたものである。なお、「第三の故郷を見つける農家民泊」は、公益財団法人中島記念国際交流財団助成による留学生地域交流事業(日本学生支援機構事業)として実施している。
3) 受け入れ農家民宿は、グリーン・ツーリズム西木研究会の会員農家民宿である。会員農家民宿の詳細は、<https://sembokugt.exblog.jp/15281808/>(2019年2月2日取得)参照のこと。

表1. 2018年度・受け入れ農家民宿・代表者・受け入れ人数

	農家民宿名	代表者名	受け入れ人数
1	星雪館	門脇昭子・富士美	6名
2	泰山堂	藤井けい子	6名
3	のどか	高橋由希子	5名
4	里の灯	佐藤由井	5名
5	門脇	門脇砂絵美	3名
6	一の重	佐藤郁子	6名
7	一助	沢山節子	4名
8	ふる里	川井喜幸	4名

筆者は、「第三の故郷を見つける農家民泊」事業全体の計画、実施、統括を担った。2018年度に実施された「第三の故郷を見つける農家民泊」の参加者は、秋田大学、国際教養大学、秋田県立大学、秋田工業高等専門学校、ノースアジア大学の留学生、日本人学生および、秋田国際交流協会の外国人研修生である。留学生22名、日本人学生8名、外国人研修生4名、引率教職員5名の合計39名が参加した。留学生、外国人研修生は、中国、台湾、韓国、マレーシア、タイ、ラオス、アメリカ、フランス、オランダ、フィンランド、ルーマニア、ロシア、ブラジル、アルゼンチンの出身者であった。日本語レベルはゼロビギナーから上級者まで多岐にわたっていた。これらの参加者は表1の1～8の農家民宿に3名～6名ずつのグループに分かれて滞在した。グループ分けは、受け入れ農家民宿の部屋数、参加者の属性や宗教、アレルギー等を考慮して行った。各グループには、引率教員またはグループリーダーを配置し、グループをまとめる役割を担ってもらった。グループリーダーの役割としては、活動中の写真撮影、連絡調整、グループ活動に関する報告等が挙げられる。

活動終了後、最終成果を秋田大学国際交流センター「留学生等交流推進協議会」のウェブサイト上に報告書として公開⁴⁾している。

3. 2018年度「第三の故郷を見つける農家民泊」の詳細

3.1 2回の農業体験プログラム

「第三の故郷を見つける農家民泊」は、2回の農業体験プログラムを通じ、仙北市西木町の生活を理解し参加者間の交流を深めていくものである。ほとんどのグループメンバーは初対面であり、農業体験をおして交流し、関係を深めていくことになる。農業体験については、受け入れ農家ごとに異なり、「具体的なメニュー化は図らず、季節や天候により刻々と変わる農家の生活全般そのものを体験してもらう」(仙北市農山村体験デザイン室, 2019)こととしている。

4) 詳細は秋田大学国際交流センター「留学生交流推進会議」の中の「留学生交流事業報告書」 http://www.akita-u.ac.jp/honbu/inter/in_impulsion.html(2019年2月2日取得)を参照のこと。

(1) 第1回目「農業体験ツアー」2018年10月13日(土)～14日(日)

- 1 グループごとに各農家に分かれ農作業を体験
- 2 農家に宿泊し、グループメンバー同士や農家の方々とさらなる交流
- 3 参加者全員で、各農家で留学生と協働で作った料理を持ち寄り、かたくり館⁵⁾にて昼食会と農作業体験の振り返りを行う

(2) 第2回目「収穫感謝祭ツアー」2018年11月10日(土)

- 1 第1回目と同じ顔触れで集まり、農家で収穫した米を用いた餅つき大会を開催。その後、地元
の農作物やお餅を用いて調理する
- 2 各グループで農業体験ツアーを振り返ってのアルバム作成
- 3 料理を食べながら、交流会とアルバム贈呈を実施

以下では、筆者が引率したグループでの農業体験をもとに、2回の活動の詳細を記す。筆者は4名の留学生と共に、表1の4「里の灯」に滞在した。参加留学生は、王さん(男性・中国出身)、ボウさん(女性・タイ出身)、ディッキーさん(男性・ラオス出身)、キャロリンさん(女性・フランス出身)である。(氏名は全て本人がこう呼んでほしいと決めたニックネームである。)各参加者の日本語レベルは初級から上級まで多岐にわたっていた。王さんは秋田県立大学の修士課程で工学を学んでおり、日本語能力試験1級に合格している。ディッキーさんは日本の日本語学校で2年間日本語を学んだ後、秋田工業専門学校で学んでいる。ボウさんとキャロリンさんは、国際教養大学の交換留学生であり、日本語は初級レベルである。グループメンバーは、皆、初対面であり、農業体験をとおして交流をしながら関係を深めていった。

以下では、上記の学生と、受け入れ農家「里の灯」の佐藤由井さん、佐藤二郎さんに行ったインタビューと、農業体験中に撮影した写真をもとに活動の様子を示す。インタビューは、30分から1時間程度実施した。王さんには、2018年12月18日に、ボウさんには、2018年12月20日に、ディッキーさんには、12月23日にそれぞれ実施した。佐藤さんご夫妻には、10月14日、11月10日にインタビューを行った。インタビューデータおよび写真については、許可を得た上、使用している。なお、参加学生のキャロリンさんについては、連絡がつかず、インタビューを実施することができなかった。

3.2 第1回目「農業体験ツアー」

2018年10月13日(土)～14日(日)に「農業体験ツアー」を実施した。筆者が滞在した「里の灯」では、栗拾い、野菜収穫、きりたんぼ作り、薪割り、トラクターの試運転、料理、民芸品づくりなどの活動を行っ

5) 「かたくり館」は、平成18年4月にかたくり群生地入口に、仙北市活性化施設としてオープンした。市の指定管理委託施設であり、かたくり群生の郷保存会、西明寺栗生産販売事業協同組合西木町観光協会の各事務所にもなっている。 <https://katakurikan.jimdo.com>(2019年2月2日取得)

た。以下では、参加者がそれぞれの活動についてインタビューで語っている箇所を抜粋しながら、活動内容を紹介する。

【野菜の収穫－農作物についての知識を学ぶ・収穫した野菜を料理する】

以下では、まず、野菜の収穫の様子を示す。佐藤由井さんが畑で育てた野菜について説明をしてもらいながら収穫していった。収穫した野菜は、佐藤由井さんの指導のもと料理した。以下に野菜の収穫と料理について、参加学生の王さん、ディッキーさん、ボウさんがインタビューで語った一部を示す。

王 お母さんが、私たちにいろんな野菜の名称を教えてくれて、あと、食べ方、あと、栽培の方法。とりあえず、いろんな農作物の知識を教えてもらった。

市嶋 そうですね。

王 それはよく覚えています。とても新鮮な野菜で。(中略)前も言ったんですけど、あまり料理が作らないタイプなんですけど。だから、日本に来てから、初めてこんなおいしい料理を食べて、本当に、しかも本場の日本の料理ですよ。感動しました。

ディッキー 黄色の野菜。あれは、えっと・・・。

市嶋 菊。

ディッキー 菊、はい、そうです。それも、面白かったです。

市嶋 なんで面白かったですか。

ディッキー その菊、花は、それは、最初は食べられないと思ったので、はい。初めてその花を食べました。

市嶋 そうなんですね。

ディッキー おいしかったです、はい。あの、花を取りながら、育てた花、野菜のを知ることができました。食べるだけじゃなくて、料理して、そのこともうれしかったです。

ボウ お花？ 食べる。それは、面白かったです。

市嶋 面白かった？なんで？

ボウ 多分、はい。日本の料理は、見たことがありますけど、食べたことがないかな。

市嶋 珍しかった？

ボウ ちょっと、はい。お花、取りました。どうやって取る？料理する？お母さんはやさしく教えてくれて、それは面白かったです。野菜をとって、それから料理するの、それは本当に良かったです。

王さんは、野菜を収穫している時に、佐藤由井さんから農作物の知識を教えてもらったことをよく覚えていと語った。また、収穫した新鮮な野菜が食べられたことに感動していた。ディッキーさんとボウさんは、菊の花を収穫し、料理して食べたことを初めての体験として楽しんだ様子がうかがえる。

このように、学生達は、野菜を収穫しながら農作物の知識を学び、また、自身で収穫した新鮮な野菜を料理し、食べられたことに喜びを感じていることが分かる。



菊の収穫(左から王さん、佐藤由井さん、筆者、キャロリンさん、ボウさん)



料理をするディッキーさん



料理のもりつけ

【トラクターの試運転－農作業を理解する】

佐藤二郎さんは、農業体験の一環として、自身の農地で使用しているトラクターの構造や役割を説明しながら、実際に試運転をさせてくれた。以下ではトラクターの試運転について語った部分を抜粋して示す。

王 トラクター。素晴らしかったですよね。

市嶋 素晴らしかった？ 何が素晴らしかった？

王 みんな全部、初めてですから、トラクターどうやって運転するのか、あるいは、動き方、分からないですから、ちょっと新鮮感がありますよね。そして、運転してみたら、想像より意外に簡単でした。そして、達成感がありますよね。

市嶋 なるほど。達成感。どんな達成感ですか。

王 私もできるという達成感ですよ。

市嶋 そうですか。教えてもらってるときはどうでした？

王 丁寧に親切に説明してくれて。ちょっと秋田弁ですけど、分かりやすいですね。行動と言葉を兼ねて説明してくれて。農作業についてよく理解できました。

市嶋 農家民泊で、一番覚えてることって何ですか。

ディッキー 一番、覚え、トラクターかな。

市嶋 そうか、トラクターか。

ディッキー 一番覚えています。覚えていること。おじいさんが見せながら熱心に仕組みを教えてくださいましたので、嬉しかったです。運転できて嬉しかったです。農業で働くことが分かるようになりました。

ボウ いろいろな活動？

市嶋 活動、はい。

ボウ うん、できました。

市嶋 そうですね。

ボウ トラクターとか。

市嶋 トラクター。

ボウ 初めは、怖かったですけど、運転したら良かったです。おじいさんがやりながら教えてくれて、ほんとうに楽しかったです。(中略)あと、農業の仕事、分かりました。

学生達は、トラクターを運転するという初めての経験に楽しさや達成感を感じていることが分かる。また、佐藤二郎さんがトラクターの運転の仕方を言葉だけではなく実演をしながら熱心に教えてくれたことで、農作業に関する学生達の理解を促進することができたと考えられる。



トラクターの説明



試運転

【きりたんぼづくりー農家の生活を知る】

佐藤由井さんは、自身の田んぼでとれたお米を使って、秋田名物きりたんぼ作りを教えてくれた。学生達は佐藤由井さんの指導のもと、きりたんぼ作りを進めた。その後、出来上がったきりたんぼを佐藤二郎さんと共に炭火で焼いて食べた。以下に、学生達がきりたんぼ作りについて語った部分を示す。

王 きりたんぼも、面白かったですよね。しかも、おいしかった。あの日はちょっと寒い日ですけど、ちょうどきりたんぼやっているとき。しかも、おじいちゃんがきりたんぼを作っているとき、昔の日本の家庭？例えば、部屋の中に、今はきりたんぼが外に作られています。昔は、部屋の中に火をつけて、その上に鍋というのは、あるいは、他の容器が置いて、そういう昔話や、あるいは、昔の風俗を教えてくれたり。(中略)あるいは、なぜ、きりたんぼを作っているのか。そういうことが、一番印象に残っています。

ディッキー それは楽しくて、面白かったんです。そのきりたんぼも作ったとかないとか、はい。それは、はい、面白かったです。

市嶋 そうですか。

ディッキー はい、おいしかったです。その時、きりたんぼの作り方を教えてもらって、昔の話をしてくれたのが、面白かったです。

ボウ お母さんがきりたんぼの作り方、教えてくれて、楽しかったです。お母さんはいつも親切に教えてくれました。

市嶋 ああ、そうでしたね。

ボウ きりたんぼとか、作りながら料理のトピック、話しました。面白かった。

学生達はきりたんぼ作りに面白さを感じると同時に、作る過程での会話を楽しんでいたことが分かる。王さんは、佐藤二郎さんが、きりたんぼを昔はどのように作っていたのかということや、昔の風俗の話をしてくれたことが一番、印象に残っていると語った。また、ディッキーさんもきりたんぼ作りの過程で聞いた佐藤二郎さんの昔の話が面白かったと語った。ボウさんは、きりたんぼを作りながら佐藤由井さんが語った料理のトピックが面白かったと述べている。

このように、学生達は、体験に付随する佐藤さんご夫妻の語りに耳を傾け、そのことを楽しみ、意義を感じていたことがうかがえる。



きりたんぼ作り



きりたんぼを炭火で焼く



作ったきりたんぼを食べながら佐藤二郎さんの話に耳を傾ける

【収穫した野菜を食べる－人生を学ぶ】

その日の晩には、収穫した野菜や料理を食べながら、佐藤さんご夫妻といろいろなことを話した。以下に、食事の様子を語った部分を示す。

王 おじいちゃん。確かに、ご飯を食べるとき、いろんな人生経験を教えてくれたじゃないですか。そういう言葉、今も頭に残っています。

市嶋 そうですか。例えばどんなことですか。

王 例えば、人生は、取りあえず真面目に生きて、将来のことはまだ分からないですから、今こそ大事にしよう。そういう言葉。

ディッキー 面白かったことは、全部、面白かったけど、一番はみんなと一緒に、お父さんとお母さんと一緒に食べることかな。

市嶋 そうか、食べたとき……。

ディッキー お父さんがその音楽……。

市嶋 三味線？

ディッキー 三味線、はい、してくれました。それも面白かったです。(中略)お父さんとお母さんのコミュニケーションは、一緒に晩ご飯を食べるときは、そのときも面白かったです。お父さんとお母さんはいろいろ経験とかさしてくれてとても楽しかったです。

市嶋 そうなんだ。どんな話が面白かったですか。

ディッキー お父さんの話、昔のお父さんは工場とか働いてることとか、今までもいろいろ、なんか、生き方とか、立派になりました。

市嶋 何が、楽しかったですか。

ボウ 全部かな。

市嶋 全部？

ボウ はい。

市嶋 例えば。

ボウ 例えば、みんなと、ごはんの時、ホストファミリーと話すときは、とっても良かったです。

市嶋 ああ、そうですか。分かりましたか。

ボウ 全部じゃなくて。でも、面白い、いろいろな、新しいことが分かるようになりました。

市嶋 そうですか。

ボウ いろいろと話してくれて、面白かった。

学生達は、食事をしながら皆で会話したこと、特に、佐藤二郎さんの人生経験についてのお話や三味線演奏が面白かったと語っている。王さんは、佐藤二郎さんの「人生は、取りあえず真面目に生きて、将来のことはまだ分からないですから、今こそ大事にしよう」という言葉が今も頭に残っていると述べた。また、ディッキーさんは、佐藤さんご夫妻と共に食事をしながらのコミュニケーションが面白かったと語った。特に、佐藤二郎さんの昔の経験に興味を持っていた。また、ボウさんも「ホストファミリーと話すときは、とても良かったです」と語り、全ては理解できなくても「面白い、いろいろな、新しいことが分かるようになりました。」と語っている。

このように、学生達は佐藤さんご夫妻とのコミュニケーションをととても楽しんでいたことがうかがえる。学生達の日本語学習歴やレベルは様々であり、必ずしも佐藤さんご夫妻の日本語を全て理解できたわけではなかった。それにも関わらず、学生たちは、佐藤さんご夫妻とのコミュニケーションを楽しみ、また、人生観をも学んでいた。



食事の様子

三味線演奏

【コミュニケーションー受け入れられているという安心感】

上記では、学生達が佐藤さんご夫妻とのコミュニケーションに意義を感じ、楽しんでいる様子が見えた。以下では、なぜお二人とのコミュニケーションに意義を感じ、楽しむことができたのか、その理由を語っている部分を抜粋して示す。

王 言葉じゃなくてもコミュニケーションができるはずなんですけど。例えば、最初の日。どういうふうの説明するのか。お母さんとお父さん、優しくしてくれて、そういう感覚が感じられます。(中略)それからコミュニケーションが楽しくなりました。

ディッキー 全部、分かってないですが、その話の言葉は、例えば、その文章は言葉3個、4個だけ分かって全部はほとんど大体、分かってますから。

市嶋 ああ、そうなんですね。

ディッキー でも、全部は分からないですが、はい。(中略)全部、分からないですが、その文章は例えばその言葉だけ分かっててとか、その話を分かってます。もう全部はちゃんと分かってることは、じゃないですが、はい。そんな感じです。(中略)それで、問題ないです。あと、お母さんたち、親切なので、安心してそこにいられました。

ボウ 日本語は、でも、ちょっと、分かりにくいでした。それから、ちょっと、私は、恥ずかしいと思う。

市嶋 恥ずかしい、そっか。じゃあ、ちょっと、ストレス、ありましたか。

ボウ 分からないときは、ちょっと大変だった。だと思いました。

市嶋 そうですか。

ボウ でも、ストレスはないでした。みんなは、優しかったです。

市嶋 優しかった？

ボウ うん、みんなも。先生とか、みんなは、優しかったです。ですから、大丈夫だった。They were considered even though I couldn't understand all what they saying but they still tried to talk to us and they always caring.

王さんは、佐藤さんご夫妻が、初日に優しく接してくれたのでコミュニケーションが楽になったと語っている。また、ディッキーさんは、会話の全てが理解できなくても、その中のいくつかの言葉が理解できれば、全体の意味を類推できるので問題ないという趣旨のことを述べている。また、佐藤さんご夫妻が親切だったので、安心してそこにいることができたと言っている。一方で、ボウさんは、日本語が理解できなかったことを恥ずかしく感じ、大変に思っていたことが分かる。それにも関わらず、そのことをストレスに感じることはなかったと言う。それは、皆が優しく接してくれたこと、さらに、全てを理解できなかったとしても常に話しかけ、気にかけてくれていたからであると語った。

このように、佐藤さんご夫妻が常にあたたかい配慮を持って学生達に接し、受け入れてくれたからこそ、学生達は佐藤さんご夫妻とのコミュニケーションを楽しみ、「安心してそこにいられる」と感じることができたのではないかと。

3.3 第2回目「収穫感謝祭ツアー」

第1回目の「農業体験ツアー」から1か月後の2018年11月10日(土)に実施した収穫感謝祭では、第1回目と同じ顔触れで集まった。収穫感謝祭では、農家で収穫したお米で餅をつき、その後、ついた餅を用いて笹餅を作った。また、各グループで農業体験ツアーを振り返ってアルバムを作成し、料理を食べながら、交流会とアルバム贈呈を実施した。アルバムに使用した写真は、第1回目の「農業体験ツアー」の際に撮りためた写真を用いた。アルバム贈呈の際には、学生達がお世話になった農家の方達に感謝の意を表し、活動全体を総括した。活動の最後には、皆で集合写真を撮り、農家の方達との別れを惜しんだ。

以下では、学生たちが、収穫感謝祭について語った部分を示す。

王 餅つきは、私は、日本に来てから2回目ですから、ちょっと最初の回は全然やり方も分からないし、今回の餅つきは、少しだけ上手になったかなと思います。そして、あと、みんなと一緒にご飯を食べたり、アルバム？

市嶋 うん、アルバム。

王 アルバム作ったり、この農家民泊のことを、振り返して、すごくよかったと思います。(中略)みんな、再び集まってよかったと思います。

市嶋 そうですか。どの点が、何がよかったですか。

王 1回目、既に友達になりましたので、普段、各地のことやってるので、あまり会う機会がなかったので。

市嶋 そうですね。遠いしね。

王 また会うことできるのは、素晴らしいじゃないですか、と思っています。

ディッキー みんな優しいと思ってます。はい。あとは、タイ人のボウさんもお土産とか買ってくれました。

市嶋 そうだね。

ディッキー うれしかったです。

市嶋 そうですね。うれしかったですね。

ディッキー フランス人の・・・キャロリンさん、王さんもいろいろ話しました。仲良くなりました。

市嶋 良かったですね。

ディッキー はい。みんなともう一回会えて、嬉しかったです。

ボウ 二回目も楽しかった。アルバムは、いいアイデア？グッドアイデアだと思います。
It's kind of good way to thank like the hometown, I think it was very good.

市嶋 ああ、

ボウ いろいろ思い出しました。

学生達の語りからは、収穫感謝祭での再会を喜んでいる様子がうかがえる。「第三の故郷を見つける農家民泊」の特徴は、1回目の活動終了後、1か月後に再び集まって活動をするところにある。学生達が語っているように、2回の活動により、参加者間の関係が深まっている様子がうかがえる。ディッキーさんが語ったように、ボウさんは、タイのおみやげをグループメンバー全員にプレゼントしてくれた。プレゼントを渡しながら、グループメンバーや佐藤由井さんに感謝の気持ちを伝えていた。



もちつき



笹もち作り



ついたもちを皆で食べる



アルバム作り



アルバム贈呈



集合写真

4. 受け入れ農家—「これでいいんだ」という自信

これまで、留学生の語りから、「第三の故郷を見つける農家民泊」の活動の全貌を示した。以下では、受け入れ農家「里の灯」の佐藤さんご夫妻の語りから、留学生達をどのような思いで受け入れてくれているのかを示した上で、「第三の故郷を見つける農家民泊」の活動を総括する。

佐藤二郎 最初は大変だっていうことは、別に経験するからさ。それが、これでいいのということから、慣れてきたら楽しいことになってつながってきたっていうこと。

佐藤由井 外国の人がたって、入れたことなかったから、すごく緊張、ドキドキ、すごくそういうのがあったよな。でも、来たら、皆さん打ち解けて。ああ、これでいいんだっていう、そういう気持ち。

佐藤さんご夫妻の語りからは、留学生を受け入れていく中で試行錯誤しながらも、「これでいいんだ」と感じるようになり、受け入れそのものを楽しむようになっていったことがうかがえる。

佐藤二郎 この留学生はいろんなことを学びたくて来てるだろうから、俺たちから見れば、私から見れば何、学び取るところがあるんだろうという。だけど、農業に関しては全て、しかも本当に自信があるから、50年も何代も3代も続いているのさ。自信なくやって、すぐ農業なんかやめてしまう。

市嶋 そうか。自信があるから。

佐藤二郎 そういうことで、自信があるから受け入れられるさ。これでいいのって言えばこれでいいんだよって、それでいいんだよって自分さ、言い聞かせて、こうやって来るの楽しいんだ。

佐藤由井 いや私は、どうしたら野菜を、シンプルなほんとの野菜の味を見せたいの。だからいろいろ、料理でも何でも、いろいろ、いろんなものさ入れるの、私はそれあんまり嫌い。

市嶋 野菜の味がすごいですよね。

佐藤由井 私はほんとの野菜の味を覚えてもらいたい。食べさせたい。自分でも、そういうの食べたくないから、何でもかんでも入れたのは嫌だから。

市嶋 既成品はね。やっぱそういうふうには野菜の味を？

佐藤由井 知ってもらいたい。

上記の語りから、佐藤二郎さんは、自身のたずさわる農業に自信を持ち、その農業を学生達に伝えたいと考えていることが分かる。また、佐藤由井さんも、「シンプルなほんとの野菜の味」を知ってもらいたいという思いでいる。佐藤さんご夫妻は、農業や育てている野菜に自信や誇りを持ち、その自信を基に、「これでいいんだ」と確信し、学生達に農業や野菜の知識を伝えてくれている。また、学生達を受け入れることを楽しんでくれている。グリーン・ツーリズム西木研究会のモットーである「相手をもてなすことだけでなく相手の時間を大切にしながら自分たちも楽しむ、自分たちがいかに訪れた人たちと遊べるか、西木でなければできないことは何かを考えながら活動していること」(仙北市農山村体験デザイン室, 2019)を実現していると言える。相手をもてなすだけでなく、自分たちも楽しむという点、何よりも佐藤さんご夫妻が留学生を受け入れることを楽しんでくれていることに大きな意味がある。その思いは学生達にも伝わっているのではないか。

5. 「第三の故郷を見つける農家民泊」の意義と日本語教育学の課題

ここまで、「第三の故郷を見つける農家民泊」の詳細を示してきた。3.2の「農業体験ツアー」について語った学生達の語りの中でも注目すべき点は、野菜収穫、きりたんぼ作り、トラクター試運転、料理、食事といった体験をとおして交わされた佐藤さんご夫妻とのコミュニケーションが楽しかったこととして挙げられているという点である。活動中、学生達の口数は決して多くはなく、筆者は、活動や会話の内容を理解できているのだろうか、楽しんでいるのだろうか、と不安に思うこともあった。しかし、学生達の語りからは、それが杞憂であったことが分かった。実際には、学生達は、農業について、農作物について、農家の生活について、人生について語る佐藤さんご夫妻の話に熱心に耳を傾けていたのだ。その内容は、言葉からの情報のみならず、活動中における身振り手振りや、モノの提示、作業などをとおして、総合的に理解されていったと考えられる。一方で、ボウさんは、「分からないときは、ちょっと大変だった」とも語っていた。それにも関わらず、ストレスには感じなかったと言う。それは、ことばの全てが理解できていなくても、佐藤さんご夫妻が農業や農家での生活のことを伝えようと熱心に語りかけ続けてくれたからである。また、なにより、お二人が留学生との交流を楽しんでくれているということが伝わったからこそ、留学生達も農業体験を有意義に感じ、楽しむことができたのではないか。そこには、言語を異にしながらも活動を共にする過程で築かれていった安心感、信頼感が底流していたと考えられる。

牲川(2013)は、『農家に学ぶ留学生受入の思想と方法－秋田県仙北市西木町のグリーン・ツーリズム事例集』の中で、農家の方々のこれまでに実際出会ったトラブルとその解決法を提示している。その中で、日本語教育学について批判的に考察している。1970年頃の日本語教育学は、日本人と同じように考え行動しながら日本語を使えて初めて、日本語能力が身に付いたと言えるといった同化的な主張をし、最近ではそれぞれの文化を尊重させるとしながら、国籍や民族による文化の異なりを強調し、結果としてその間に強固な壁を築いてしまうような教育をよいものとしている研究も行われていると述べている。そして、そのことを考えた時、農家の方々よりも、日常的に外国人に関わっている日本語教育者の方が、個々の人々を国籍や民族という枠の中に閉じ込め、ことばやそれ以外の方法で気持ちや考えを交換することを妨げてきたのではないかと問題提起している。

近年、日本語教育学の分野において、日本人学生と留学生が共に学ぶ、共修授業が注目されるようになり、多くの実践報告がなされるようになってきた。それらは、さまざまな活動を通じた日本文化の理解が標榜されていることが多い。または、それぞれの国の文化の違いを理解し合うような活動が行われている。一方で、このような活動は、牲川が指摘したように、壁を築くことにつながり、さらに、集団を類型化して認識することにより、個人一人ひとりが見えなくなる「ステレオタイプの罠」(川上, 1999)に陥る可能性がある。また、従来の接触場面研究においては、優れたコミュニケーション方略をもつ母語話者は、外国人との接触経験の量・質が高い者とされ、母語話者の優れた調整行動についての教育対象化が目指されてきた。さらに、接触場面の実態を反映した支援や教材化の必要性も主張されてきたこ

とが報告されている(市嶋・牲川, 2013, 市嶋, 2014)。

「第三の故郷を見つける農家民泊」に参加した学生は、必ずしも皆が日本語能力が高いわけではない。また、佐藤さんご夫妻も外国人との接触が多いわけではない。佐藤さんご夫妻は、決して学生達に「日本文化」の理解や高い日本語能力を求めることなく、農業のプロとして、学生達に様々な経験を提供してくれた。自身らが自信を持って従事する農業や農家の暮らし、人生観を真摯に伝えてくれた。お二人には、伝えるべき、語るべき農業というテーマがあり、お二人の語りに耳をかたむけながら、学生達は、体験をとおして、その意味を理解していった。語るべきテーマ、内容を持ち、それを伝えようとする動機があれば、充実したコミュニケーション活動がおのずと成立することが、学生達の語りからうかがい知ることができた。重要なのは、充実したコミュニケーションを実現するための内容とそれを伝えようとする強い動機なのではないか。

「第三の故郷を見つける農家民泊」とおして見えてきた佐藤さんご夫妻と留学生とのコミュニケーションのあり方は、日本語教育学に大きな示唆を与えてくれる。この知見を「人間の生の充実とそれを支えるための言葉の創造という日本語教育的な知」(市嶋2014: p259)へと発展させていくことが筆者の今後の課題として残される。

参考文献

- 秋田地域留学生等交流推進会議(2018a)「第三の故郷を見つける農家民泊2018実施要項」「第三の故郷を見つける農家民泊2018実施報告書」p4, 秋田地域留学生等交流推進会議 http://www.akita-u.ac.jp/honbu/inter/pdf_impulsion/noumin7.pdf (2019年2月2日取得)
- 秋田地域留学生等交流推進会議(2018b)「秋田地域留学生等交流推進会議要項」「あきた留学生交流」30, p28, 秋田地域留学生等交流推進会議事務局(秋田大学国際課) http://www.akita-u.ac.jp/honbu/inter/pdf_impulsion/akita_30.pdf (2019年2月2日取得)
- 市嶋典子・牲川波都季(2013)「接触場面におけるカテゴリー生成と変化のプロセス-母語話者と非母語話者の調整行動に注目して」『2013年度第8回日本語教育学会研究集会予稿集』pp.9-14.
- 市嶋典子(2014)「農業従事者と留学生の接触場面に関する一考察-農業体験活動における調整行動に注目して」『秋田大学国際交流センター紀要』3, pp.1-13
- 市嶋典子(2014)『日本語教育における評価と「実践研究」-対話的アセスメント: 価値の衝突と共有のプロセス』ココ出版
- 川上郁雄(1999)「日本事情」教育における文化の問題』『21世紀の日本事情-日本語教育から文化リテラシーへ』1, pp.16-26.
- 牲川波都季(2013)『農家に学ぶ留学生受け入れ思想と方法-秋田県仙北市西木町のグリーン・ツーリズム事例集』秋田大学国際交流センター
- 仙北市(2019)『仙北市の概要』<https://www.city.semboku.akita.jp/outline/index.html> (2019年2月2日取得)
- 仙北市農山村体験デザイン室(2019)「グリーン・ツーリズム西木研究会」『仙北市農山村体験デザイン室ブログ』<https://sembokugt.exblog.jp/15281808/>(2019年2月2日取得)
- 独立行政法人日本学生支援機構JASSO(2019)『留学生地域交流事業(公益財団法人中島記念国際交流財団助成)』<https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryujigyou/index.html> (2019年2月2日取得)

謝辞

「第三の故郷を見つける農家民泊」を実施するにあたり、グリーン・ツーリズム西木研究会のみなさま、藤井けいこさん、門脇富士美さん、秋田大学の佐藤茜さん、秋田県立大学のテリー・リー・ナガハシさん、特に、今回、私達を受け入れてくださった「里の灯」の佐藤由井さん、佐藤二郎さん、には多大な協力をしていただきました。心より感謝申し上げます。